広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	機関車愛情物語ゾラの『獣人』
Author(s)	檀上，文雄
Citation	フランス文学 ， 12 ： 32 - 39
Issue Date	1978-05-20
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040910
Right	
Relation	

機関車愛情物語　ゾラの『獣人』

檀　上　文　雄

陰惨な小説――車内で発生した殺害事件を軸として物語が構成されている推理小説的要素の濃厚な――『獣人』から，ＳＬ讃歌の機関車物語としての晴朗な要素だけを取りあげてみた覚書をお届けしょう．

フランスにおける鉄道の開通は1830年で，以後1870年の普仏戦争による敗戦をみるまでが，この国の鉄道建設の黄金時代であった．1840年生まれのゾラは，鉄道の発展とともに成長したわけで，特に彼の場合には父の経歴(1)と彼自身の受けた教育(2)からみて，第二帝政時代の完全な社会絵巻を描こうとする『ルーゴン・マッカール叢書』中の一巻において鉄道――鉄道員の生態――を取上げたことは，けだし当然であった．

本格的に鉄道小説を執筆する考えを堅めたのは，1878年のメダン転居後であり，新しい住居はル・アーブル線の線路ぎわ近く，昼夜列車の通過が書斉から眺められる．同年の7月，折柄パリで開催中の「万博」見物の際メダンを訪れたアミチス（「愛の学校（クオレ）」の著者）は，次のように伝えている．

「全く独創的な小説だ．この小説は鉄道線路に沿って展開される……客車内での情事，機関車の運転，衝突，ショック，乗客の動揺，脱出，彼が長らく考想を練っている，煙につつまれた，騒々しい，暗黒の世界をそこに見るであろう．」(3)と．

《……Tutto quel mondo nero, fumoso e rumeroso, nel quale egli vive col pensiero de lungo tempo.》

この暗黒の世界という言葉から，鉄道を中心とした怪奇小説，あるいは犯罪小説の構想がたてられていたことが分る．

当時ゾラは『ルーゴン・マツカール叢書』を鋭意執筆中であり，祖先の好ましからぬ遺伝要素の影響を受けた人物群象が，生活環境の異なるにつれて金融家，農民，鉱夫……となって叢書の作品中に登場させられていたが，まだ鉄道員は取上げられておらず，その溝を埋める必要があった．

叢書第17巻『獣人』執筆の決意は固まったものの，アミチスの訪問から『獣人』執筆までには，実に11年間に及ぶ永く忍耐強い入念な準備や資料の蒐集が行なわれた．(4)「創作ノート」は676枚(5)を数えるにいたった．――専門書(6)を熟読し，蒸気機関車に関する十

分な専門知識を把握したうえで，西部鉄道の機関車に漆乗させてもらい機関士と助士の苦労をつぶさに体験する――

『獣人』の執筆を進めるに当って，鉄道社会の百科全書的記述に陥込む惧れのあったこの作家の創作態度を救ったものは，列車内での殺害を軸として筋を展開させながらも，その反面において機関士ジャック・ランティエ(7)と助士ペクウが組んで受け持つラ・リゾン号機関車への愛情物語に纏めあげることができたためである．

黒煙をあげて疾走する蒸気機関車の姿こそ，鉄道小説の序章にふさわしいであろう．だがゾラは，第一章のほぼ全部をパリ・サン・ラザール駅の紹介に当て，待合室とプラットホームの駅頭風景は平板な描写にとどめ，駅の付帯施設である待避線，機関庫，石炭置場までわれわれに見物させる．章を進めるにつれ踏切番の小屋，田舎駅，広野の信号所も紹介される．電信係のニザール，転撤係のオジール，いちばん下っぱの鉄道員である踏切番の娘フロールまでが顔を出し，無味乾燥な事実の羅列に陥りやすい鉄道施設や職場環境の説明を，彼らの赤裡々な姿や対人関係が，辛うじて救っている．

だが鉄道員の生態とその環境描写に熱心なあまり，ゾラは思わぬ罠にかかった．鉄道の利用者が無視されたことである．乗客による旅の印象や車窓風景，蒸気機関車の描写は一個所もみられない．ゾラは鉄道員を通してしか鉄道を観察しなかったのである．事故のため列車が雪の広野で立往生させられ，旅行者が雪に埋もれた列車から脱出して踏切番の小舎に緊急避難する場面でも，旅行者は作中の端役にすぎない．

『獣人』の主人公は，鉄道員ではなく，ましてや一般の旅行者でもなく，蒸気機関車のラ・リゾン号へと転換してゆく．この機関車に機関士のジャックと助士のペクウが一緒に組んで勤務する仕事への献心的な職務愛と，ラ・リゾン号へのジャックの偏愛にまで高まる愛情に絞って，筆者は以下で論旨を進めることにする．（したがって前述したように『獣人』を一種の推理小説として読む立場には一切触れない．）

> それは急行列車用の機関車のひとつで，二つの車輪は対になっている．団体は大きいがなかなかしゃれていて，大きな車輪は鋼鉄の腕で結ばれ，胸先は広く大きく，腰は伸びて力強く，その理詰めで適格な造りは金属製の生物の至高の美を示している．(8)（P．114－115）

ゾラは，この蒸気機関車を三通りの描写方法によって完璧に描こうとつとめる．その一つは，性能や機器類が他の機関車と異なり優秀であることを強調していることである．

彼女の始動がいとも容易なのは，すばらしい車輪と，特にピストン弁の調整が完璧なためといわれてきた．彼女があまり石炭を喰わず蒸気をあげるのは，煙管の銅が良質なのと罐（カマ）の恵まれた配置によるといわれてきた．（P．115）

次には動物の比喩を用いて，ラ・リゾン号の走行を競走馬の全力疾走にたとえている．柔順だが気儘なので，思いどおり運転できないとき，ジャックは「喘息持ち」（pous-sive），「駑馬」（sale rosse）とののしる．このような動物比喩は，ラ・リゾン号機関車の終熄の際にも用いており，また機関車の故障は生き馬の苦悩になぞらえている．

ところでゾラは，第三の描写法では，この蒸気機関車を擬人化して女性に見立てている．リゾンは西部鉄道会社コタンタン地方にある田舎駅の名称であるが，ゾラはジャックの受持ち機関車をラ・リゾンと呼び，女性の一人として作中で活躍させる．

列車が吹雪で立往生したとき，ジャックはラ・リゾンを点検し「表面のすり傷」だけしか見当らないが，「もしかしたら内臓に重大な欠陥が起きているかも知れない……彼女は苦しそうな息を吐いて発車し，まだ麻痺している重そうな車輪を数回回転した……こうなったのは，雪のせいで，命取りの寒気を心臓に受けたのだ．」（P。163－164）とのべている．

機関車を女性に見立てたこの擬人化した描写法がいちばんヴィヴィッドに描かれているのは，ラ・リゾン号の「死」の場面である．ジャックは瀕死の重傷だが全心全霊を彼女に注ぐ．「とうとうジャックは瞼を開いた．どろんとした目は，だれだか見分けがつかない様子だった……しかし彼の視線が，最期の息を引きとろうとしている機関車に出合うと，最初驚愕の色を示したが，次いで募り行く感動に顫えながら，じっとそれに注がれた。彼女，ラ・リゾン号は彼にもよく判った．」（P．230）

他の登場人物は，辱められ，喉を締められ，毒を盛られ，粉粋され，次々と消えてゆくが，ジャックとラ・リゾンの関係は最後まで愛情を保ったのである．

ゾラはジャックがラ・リゾン号を受持つようになった四年来の彼女へ寄せる愛情を，時の流れに副い，感情の起伏を通じて描く．

ジャックは最初，ラ・リゾンが好きではなかった．ジャックは遺伝的素質のため，女の肌をみると殺意を起さずにはおれないから，その抑制手段として意識的に女を遠ざけ，機関車を好きになろうと努めた．そして機関車を運転しての勤務中には純粋な幸福感を味わえるので，ラ・リゾンへ自ら愛情を抱くに至ったのだ．

だがジャックは，セベリーヌ（助役ルヴォの妻）の愛人になると，ラ・リゾンを見捨てだした．セベリーヌのことが胸一杯で，ラ・リゾンが早く走らないとすぐ怒りだす．例の発作が再発しかけると，理性は乱れる．はたまたこのサディストは絶望した恋人のように

ラ・リゾンとのよりを戻そうとあがく.

彼は，またラ・リゾンへの愛情によって立ち直ろうと試みた．そして掃除に何時間も費し，助士ペクウに鋼鉄を銀のように光らせることを要求した．（P．197）

このような偏愛は，ジャックの苦悩を深めるばかりである．雪の広野での立往生以来，ラ・リゾンは「重病人」になり，疲れ果て，以前より御し難くなったからである．そしてラ・リゾンが最後の息をひきとったとき，『獣人』には大きな空洞が生まれる．交代した機関車にジャックはなんらの感情を抱くことができない．この機関車は，ただ608号機関車と呼ばれるだけだ．感動的だった機関士と機関車との愛情交換は，ジャックのラ・リゾン号への哀惜の念を残して消え去る．

ラ・リゾンはジャックの感情を清めただけではなかった．助士ペクウとの友情の絆ともなっていた．就業規則によって二人は一緒にラ・リゾン号を受持たされているので，離ればなれに勤務することはできない．また故障すれば直るまで一緒に勤務を待機する．昼夜の別なく，風雨降雪をおかして運転する機関車の運転台での苦難に満ちた勤務を通して二人は堅く結ばれていた．

ジャックはペクウより10年年下だったが，彼に対しては父親のように振舞い，ペクウはペクウでその善意に犬のような献身で応えた．彼ら二人と機関車とは真の三人家族を成し，決して争うことはなかった．（P．116）

ラ・リゾンが転覆事故で「死ぬ」とき，ペクウは自責の念にうろたえながら機関車に近寄る．喉を詰らせ，じっと傍に立っていたペクウにとって，それは堪えがたい光景だった．彼らの仲よしのラ・リゾンは死に，今また機関士もあとを追おうとしている．彼らの三人旅はもうお仕舞だ！　彼女の背に跨って何百里も飛ばした旅行もおさらばだ．一言も交わさずとも，三人の気はしっかりと合い，理解し合うのに合図一ついらなかった．ああ，可哀そうなリゾン！　……ペクウは激しく啜り泣き始め，しゃくり上げてはその図体を揺すって抑えることができなかった．（P．231）

機関車がなくなったことは大きな打撃で，どんな困難も友情に結ばれて乗り切ってきた二人の仲を残酷にひきさく．

細なことにも憎悪の念を燃やすようになり，新たに受持たされた機関車は，二人の仲を戻させることができない．二人の憎悪は頂点に達し，摑み合いの喧嘩になり，取っ組み

あって線路上に転落し，轢死してしまう．

ラ・リゾンは陰惨な犯罪小説に清朗な生命の息吹きを与えており，ラ・リゾンが主役を演ずる場面から，われわれは詩情をさえ感ずる．しかもこの詩情は抒情的なものではなく叙事詩から受ける詩情ともいえるもので，黒煙をあげて驀進する機関車の姿にはダイナミックな詩情を感じ，気息奄奄たるその終熄からは悲劇を鑑賞するにもにたパセティクな詩情をわれわれは受けるであろう．次のような描写がある．

《 Avce ses cuivres claires, ses aciers luisants, la machine glissait, arrivait de sa marche douce et foudroyante, sous la pluie d'or de la belle matinée. 》 (P. 222)

われわれ読者が，この描写から何らかの詩的印象を受けえたとしても，それは機関車を日常運転する機関士と助士にとっては不断に感じられる感覚であり，ゾラ自身にとっては機関車漆乗から得られた観察事実を平板に描いたにすぎないとも言えよう．だとすれば叙事詩を味うにも以た印象を作中諸所で受けるのは，どうして生ずるのであろうか．ゾラの描写(9)は精緻であり，事実の細密画的な冗長な積み重ねが，ついに逞しい迫力をもって読者に迫り，われわれに詩情を感じさせるに至る場合があると述べておこう．

『獣人』は，巨大な拡がりを持つ鉄道社会の紹介が一方にあり，そこでは生身の人間である鉄道員による痴情犯罪が行なわれる．機関士ジャックの受持機関車への献身ぶりにはサデイストの偏愛があり，このため果ては悲劇に終る．作者ゾラは鉄道なり鉄道員に対してどのような感情を抱いていたのであろうか．

ジャックは隔生遺伝による犯罪を犯しやすい機関士であり，殺された情婦のセベリーヌは駅助役の妻であり，その夫は鉄道会社の重役グラモン氏の殺人犯であり，また列車を転覆させたフロールは踏切番の娘である．鉄道員とその家族はすべて獣人であろうか．鉄道はこのような凶悪犯罪を犯させやすい非人間的な職場だったのであろうか．

日常の勤務，居住環境と犯罪との間に何らかの必然的な関係が存在するならば，作者はその間の事情を読者に納得のゆく説明をしなければならない．そのような関係はむろん存在するはずはないのである．かえって当時鉄道は一般から羨望される職場であり，機関士にとって勤務は過酷(10)ではあるが，給与は極めてよく(11)彼らはエリート的存在であった．犯罪の意図は各人各様であって，犯罪は鉄道の運営とは無関係に行なわれたのである．ただ列車が犯行に便利な手段として利用されたにすぎない．

ゾラは前述したように『獣人』執筆に当って莫大な量の資料を蒐集したので，これら資

料を全て消化するには，犯罪を設定して読者の注意を喚起させ続け，退屈させない配慮が必要であったと考えられる．またあらゆる角度から鉄道社会を描写しては，筋の統一は図られず失敗作に陥る惧れがあり，犯罪の設定はその救済手段でもあったのであろう．

ゾラは社会正義の味方，社会改良の信奉者であったことは周知のところであり，その反面において模範的な日常生活の実践者であり，現実を肯定する楽天家でもあった．

終章での，主を失い雪の広野を暴走する機関車は，人間の与えた推進力にあくまで忠実に，罐の石炭が燃えつきるまで進行し続ける．機械は日進月歩で進歩し続け，社会に日々多大な恩恵をもたらすが，人間精神の進歩には何ら寄与するところはないのである．このことを毒を盛られ死の床に伏すフアジー叔母さんは理解していた．

> たしかに結構な発明にちがいないね．あの速いこと．人間はだんだん悧口になるんだね……でも，わたしたちみたいな野獣は，いつまで経っても野獣なんだよ．もっと結構な機械が発明されたって駄目さ．その蔭にはやっぱり野獣は絶えないんだよ．（P．35）

社会の改良を夢見る空想社会主義者たち．人間英知の進歩発達を信ずる作家たちとは異なり，ゾラは現実をあるがままに容認している．

どの国の鉄道においても事情は同じであるが，進行中の車内で殺害が行なわれても，列車は運転を打ちきらず，ひたすら最終目的地に向けて乗客を運ぶ．一般の乗客は，人間関係がからみ合い，あるいはむき出しになって発生した犯罪にも無関心をよそおうことを余儀なくされる．また線路上で死傷事故が発生すれば，列車はちょっと停車するだけで犠牲者は放置されたまま運転は再開される．

> 決った間隔を置いた列車が通りすぎ，上り下りの列車がすれちがった．運転が完全に回復したところだった．冷厳な列車は，こうした惨劇や犯罪を知らぬげに，我関せず焉として，その機械の全能力をもって通りすぎた．途中で線路に落ち車輪に潰された未知の人間など，どうでもよい，死体は片付けられ，血は洗われて，再び彼方へ，未来に向けて出発するのだった（P．237）

ここには明快な楽天主義にたつゾラ姿勢がみられる．終章第十章の最終部分にも「ただ未来に向って」驀進する（quand même à l'avenir）という言葉が見られるのである．

『獣人』の出版直後，ゾラは次作『金』の下書に次のように書いている．

「私はこの作品の結論として人生の醜悪を唱えようとは思わない．人生はその愛と力のためにあるがままの姿で，これを受入れなければならない．これがルーゴン・マッカール叢書の一連の作品によって表明されているものである.」，と．

注

(1) フランソワ・ゾラ　1795年ヴェニス生まれ，国籍イタリア．1821年に大陸で最初の鉄道である Rintz = Gmünden 線の建設に参画．後フランスに移りマルセイユの築港計画，エクス・アン・プロバンスの水道計画を樹てる．

(2) エコール・ポリテクニックの入試に2年続けて失敗．

(3) 『パリ訪問記』．

(4) 『獣人』の執筆は，1889年5月5日起稿，翌年1月18日擱筆．

(5) 末亡人から国立図書館に寄贈された枚数．

(6) 特に Lefevre et Cerbelaud ; Les chemins de fer を熟読している．1966年に復刻再版．

(7) 『ジエルミナール』のエチエンヌ・ランティエを登場させなければならない。彼は1846年生まれだから，1870年になると，24才だ．年令にこだわることはない．いずれにせよ若い。鉄道に就職させ，紳士に仕立てあげる．そして上役か裁判官の夫人の愛人にする．と，「創作ノート」にある．

(8) 川口篤訳『獣人』岩波文庫，昭和28年版．以下同氏訳による．但し併記した「P．数学」は livre de poche 1953年版によった．

(9) 「ゾラは，決して正確な言葉を見出し得ず，それを求めて忍耐強く摸索する所にあの長々しい描写が生まれるのである．二人が一階から七階まで登ってゆくのを書くのに4頁かかり，それから一階まで下りて来るのに2頁かかっている．」シモンズ『フランス近代作家論』河上徹太郎訳　創元社

(10) 一日に21時間，月間405時間乗務した報告例がある．

(11) 機関士の給与はきわめて良く初任給が2000フラン，1等機関士は2800フラン，それに2000フランの手当が加俸されていた．新聞代が1スウであるから，いかに高給だったかが分る．

ラ・リゾン号のモデルとして採用された蒸気機関車は，西部鉄道会社の長距離旅客列車用の120号機関車で，動輪2軸，動輪直径2米，時速80キロ／時である．なお「創作ノート」によれば，注(6)の前掲書の127頁に写真入りで紹介されていることが分る．

参考文献

Marc Baroli : Le train dans la litterature française. 1964, Editions N. M. Paris.

Raymond Prince : Les chemins de fer dans la litterature, 1955, Editions de la Capitelle, Uzès

La Vie du Rail : No. 371 ～ 375, 1952.

（鈴峯女子短期大学教授）